



2

1_お披露目された風呂絵は、御旅所から宇出津湾を望み、水平線上に立山連峰が浮かび上がる。銭湯内には曳山祭やあばれ祭などの昔懐かしい写真も展示された。2_テープカットの後に披露された巫女舞。たくさんを見物人を前に、小学生4人が見事に舞った。3_イベントを締めくくったのは、青年会会員にもメンバーが多い弥栄太鼓。4_小学生のダンスチーム「スマイルファクトリー」もダンスを披露した。5_沢の湯前の広場では、青年会会員によってイカ焼きや綿菓子などが無料で振る舞われた。6_大棚木獅子舞も駆けつけて、風呂絵の完成を祝った。



30年ぶりに描かれた 銭湯の壁画。 ここから 地域の絆 地域の元気を 発信したい。

酒垂社氏子青年会が 地元銭湯の壁画を復活

氏子の活動を通して、地域の伝統文化の継承や地域活性化に取り組む酒垂社氏子青年会（田代信夫会長・会員50人）その活動後によく利用しているという銭湯が酒垂神社前にある『沢の湯』だ。

青年会有志は、定期的な沢の湯を利用する「町風呂の会」を結成。活動外でも銭湯で語らいの場を持つようになった。

沢の湯は1935（昭和10）年に開業。現在は三代目の堀川利信さん（80）・せつ子さん（78）夫妻が切り盛りする。昔ながらの銭湯だが、風呂の壁は30年以上前から白く塗られたままだった。

「そういえば昔、銭湯の壁に絵が描いてあったなあ」

そんな入浴時の会話から、青年会は壁画の復活を企画。曳山祭で背景画を担当する上野実さんが、耐水性の合板に立山連峰を望む宇出津湾を描いた。

9月19日に開催されたお披露目イベントには、地元住民ら約300人が詰めかけた。田代会長は「銭湯の良さを再発見して、銭湯を通じて地域の人が関わってほしい」とあいさつした。

子どもからお年寄りまで、同じ風呂に入って交流する銭湯は、地域コミュニティの原点。「裸の付き合い」が地域の絆を深め、地域を元気にする。



番台のおばちゃん
堀川せつ子さん
(78) = 宇出津 =

地元の皆さんにずっと沢の湯を愛してもらって感謝と感激でいっぱいです。小さいころから見てきた子どもたちが、立派な青年になって、こんなことをしてくれました。78歳ですがこれからも頑張らなくてはという気持ちになりました。



町風呂の会会長
大目英隆さん
(39) = 崎山 =

高校卒業までお世話になった銭湯。地元に戻ってきても、おばちゃんは昔と変わらず名前を呼んでくれました。仲間の団結力で大きなことができたし、少しだけ恩返しもできたと思う。これを機に月に一回は、銭湯に入りに来て欲しい。



風呂絵を描いた
上野実さん
(46) = 崎山 =

青年会のみんなで構図を話し合ったり、立山の写真を見ながらの制作で、約2週間かかりました。初めてペンキを使って絵を描いたので苦労しましたが、おばちゃんが喜んでくれてうれしかったし、やって良かったと思っています。